

### 3.1 独立運動 100 年の

#### 取り組みを振り替える

李 斗熙

「韓国併合 100 年東海行動実行委員会(以下「実行委」)」は、その 100 年に当たる 2010 年に立ち上がった。朝鮮民衆の 3.1 独立運動 100 年を機に、去る 2018 年 11 月 29 日の「平和の少女像」の作家講演会を皮切りに、講演会、韓国ツアー、キャンペーン、デモなど様々な形でこの 1 年間、過去の歴史への反省のもと、「朝鮮半島とのつながり方を変えようキャンペーン」を展開した。ここでは、その 1 年間の取り組みを簡略に紹介しながら、その成果と課題について述べたいと思う。2018 年 11 月に行われた最初の活動となる「平和の少女像」の作家講演会は、「空いた椅子に刻んだ約束」という二人の作家(夫婦)の著作にちなんだタイトルの講演会で、「平和の少女像」制作を続ける理由とその胸の内を明かしてもらった。作家は「平和の少女像」が日本の歴史修正(歪曲)主義者が言うように、決して「反日の象徴」ではなく、「平和の象徴」であることを強調した。問題の解決のためには日本政府の真の謝罪と補償が必要であると強調した。「実行委」は、この講演会を通して「平和の少女像」が設置されるべきなのは日本であるという認識を共有した。ただ、現在の日本の状況からして、それがすぐ可能なことではない現実をふまえ、「小さい『平和の少女像』を広げるキャンペーン」を展開することにし、今年の 1 月からそのキャンペーンを展開している。このキャンペーンはその後、「あいちトリエンナーレ」の企画展「表現の不自由展、その後」が 8 月 4 日に中止されることをきっかけに注目を集め、キャンペーンは今年の 8、9 月に最高に盛り上がるようになった。このキャンペーンと「表現の不自由展、その後」中止の出会い(?)は偶然ではあるものの、日常的な運動があつてこそ可能だったと評価すべきだろう。

12 月には、91 年「慰安婦」問題を報道した植村隆元朝日新聞記者(現週刊金曜日社長)を迎え「不当な判決に抗し、歴史修正主義と闘い続ける」というタイトルで講演会を開いた。植村さんは、本人を捏造記者だと攻撃する右翼の動きが単に自分だけのことではないと話した。今も「慰安

婦」問題を授業のテーマにした韓国人教授に対する攻撃、「慰安婦」関係博物館に対するテロ脅迫など右翼の攻撃は続いていると強調した。これは、私たちがこの夏に経験した「表現の不自由展、その後」の展示中止をまさに予言したようなものである。植村さんの話は、今回の「不自由展」の出来事が日本社会の右傾化がただ単に言説にすぎるものではなく、現実の脅威として存在していると実感することになった。

今年の 3 月には、今回のキャンペーンの出発点である 3.1 独立運動 100 年記念イベントと今回の 1 年間のキャンペーンのタイトルをテーマに、東京経済大学教授の徐京植さんの講演会を開いた。特にこの日の集会は、講演会だけではなく参加者が自発的に、歌、芝居、詩の朗読、スピーチなど(マダン・参加者が共に参加する時間)を通して 3.1 独立運動の意味を振り返り、市民が先頭に立って朝鮮半島との新しい関係を築いていくことを誓った。徐京植さんは講演を通して、天皇制に対する日本のリベラル陣営の対応を取り上げて、日本社会が右傾化していく中でそれに歯止めをかけるべきの日本のリベラル陣営がむしろその右傾化に妥協したことが今の安倍政権の暴走と無関係ではないと批判した。徐さんのこの批判は、今回の天皇の代替わりの日本社会の雰囲気と違憲の可能性があることが指摘があるにもかかわらず、社会全体的に幅広い議論がされない現状を見ると、その指摘の適格さを痛感する。講演会とマダンの後は、栄周辺をデモ行進し、朝鮮半島の分断が日本社会と無関係ではなく、日本の市民が東北アジアの平和のため一緒に行動することを訴えた。

5 月には、このキャンペーンのメインイベントとして実行委が一番力を入れて準備してきた「3.1 独立運動 100 年スタディーツアー」が 3 泊 4 日間、韓国で開催された。35 人が参加した今回のツアーは、韓国の南北を縦断するハードなスケジュールではあったが、韓国出身の私でさえ今まで行ったことのないところまで訪問し、新しい経験ができた充実したツアーであった。参加者たちは早朝から夜遅くまで続いた日程でも協力し合い、少しでも学ぼうとする素晴らしい姿勢を見せてくれた。独立記念館をはじめとする様々な独立運動の遺跡地、分断の現場、統一運動家との出会い、ろうそく集会の勉強、民主化運動の痕跡など、韓国の

近現代史を貫くあらゆる場所を訪れ、今もそれぞれの場所に生きている民衆の営みと闘いからたくさんのことを学ぶことができたと思う。参加者たちは、ツアーを通して、被害者と加害者である韓国の日本の過去を記憶する方法の違いと、あきらめず歴史の主役として行動し続ける韓国の民衆の闘いに感動した。特に最終日に訪れた西大門刑務所博物館では、たくさんの人たちがこの博物館を訪れ歴史を記憶し、学ぼうとする姿に感銘を受けた様子だった。

あまりにもきついスケジュールのため参加者同士の紹介や交流の時間はほとんどなかったが、このツアーに参加した人たちが、後の8月に「表現の不自由展、その後」再開のための運動にも積極的に参加する人が多く、決して一過性のイベントではなく、また次のステップの運動の糧になったことを証明してくれたと思う。

9月には、「実行委」結成以来、続けて行っている日朝平壤宣言記念集会を高林敏之さんを迎え「日朝国交正常化に今必要なこと」というテーマで開催した。高林さんは本人の専門分野であるアフリカ関係史を中心に、北朝鮮が日本のメディアで報道されているように決して孤立しているだけの社会ではないことを強調し、日本社会が対話の相手として、その相手のことを客観的に認識する必要があることを強調した。ただ、この講演会は講演の内容とは別に、「表現の不自由展、その後」再開運動と時期が重なり参加者数など、この1年間の他の行事にくらべ盛り上がりには欠けたことは残念であった。

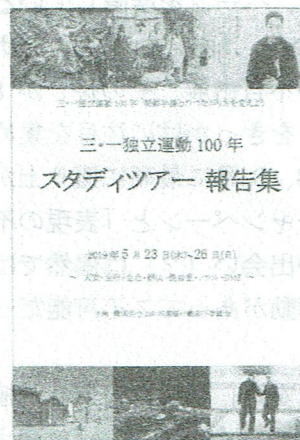
朝鮮半島の人々にとって去る1世紀は植民地支配との闘い、独立、分断と戦争、独裁支配、民主化闘争という不幸な歴史が残したものを乗り越え、統一と和解という新しい時代を拓くための闘いの日々であった。その故、韓国の人々にとって過去をきちんと覚えることは、2度と不幸な歴史を繰り返さず、その過去に戻らないように新しい時代へ進めていくということの意味する。その立場が加害者もしくは侵略者であっても、その不幸な過去としっかり向き合うことによって新しい時代を迎えられることは日本にとっても同じであるはずだ。しかし、日本社会は戦後70年が過ぎた今でもその過去とまともに向き合おうとしなければ、そのことをなかつたことにしようと

している。それによって日本社会はむしろその過去の呪縛から抜き出せないまま、その過去にとどまっているように見える。

私たちのこの1年間の取り組みは、国家を超えて東北アジアの一員として、その過去との向き合い方について学び、考える機会であったのは間違いないと思う。また、その取り組みによって新しい出会い、そしてつながりができたことは、これから運動のためにも貴重な糧になったと評価できるだろう。日本社会が抱えている様々な問題を解決するために、日々精いっぱい活動をしながらの1年間の取り組みであったから、より価値ある1年間だったと思う。ただ、私たちの運動が、「何かをやりました」という自己満足にとどまらないためには、その学びを通して何かこの社会に変化をもたらす結果を出さないといけないと思う。この1年間の日本社会は、私たちがこのキャンペーンを通して訴え、取り組んできたこととは真逆の方向にますます進んでいるように見える。それは現在の日韓関係、日朝関係、朝鮮半島の情勢を考えれば明らかである。私たちの運動の限界もあらわになった1年であったことを認めざるを得ない。

その貴重な教訓を生かしながら、具体的な結果を出す運動、より輪を広げていく運動のためにこれからも頑張っていきたい。

### 3.1 独立運動100年スタディーツアー報告集



独立運動の遺跡地から民主化運動の現場までを辿り、参加者が感じ、考えた記録です。ぜひ、手に取って一読ください。

※1冊 300円